

## 2024. 7. 27 放生津綿屋お別れ記念講演「放生津と北前船」を聞いて

68歳 職業：建築士 2024. 7. 31

「この建物は今後どのような形で活用されるべきか？」建物を約1か月調査して感じた私の漠然とした思いを無責任と思いつつも書き出してみる。

北前船の運航についての貴重な記憶の詰まった建物であり、江戸後期から現在まで地域と共に歩んできた歴史的建物である。建物の歴史を示す書画以外に北前船の帳簿や決済手形などの資料も多く残っている。

建物は毅然とした吾妻建ちの建物である。実際に調査してみると、非常に落ち着いた佇まいで、肩の力が抜けた文人好みの作りになっている。加賀藩前田家好みの居室も存在する。付随する什器・衣服も見ごたえのあるものだ。素晴らしい和算家石黒信由を輩出した土地でもある。

上記の背景を考えると、教育施設（研修所）としての再構築が理想であると私は考える。学校教育の補助的施設、社会教育の場、企業の研修の場・・・北前船という日本近海交易は中国・琉球とも繋がっており、その背景を感じながら学習をすればより刺激的に学習が進むはずだ。

それにあたって図書室の併設も望まれる。この建物は素晴らしい庭を持つ。整備をすれば京都の有名な庭にも引けをとらない景観となることは間違いない。誰しもこの場所で本を読むことの贅沢を感じるはずである。絵本でもいい、日本の古い随筆、ドイツ文学、なんでもいいと思う。この建物は教育の場として多くの可能性が潜在する。利益を優先してこの建物の可能性を否定したとすれば、自己の否定であり、地域を支えた先人の否定である。

富山県内を含め全国には大きな研修所、デザインの素晴らしい研修所、高級リゾートのような研修所が数多く存在する。しかし、この建物のように歴史を直に触れることの出来る施設は多くない。沢山の人が同時に訪れることはできないが、その弱点を補う以上に個性的な研修所になることは間違いない。

全国どこにでもある「営利目的の観光施設」にだけには成って欲しくないと思う。スペインのコルドバにメスキータというイスラム教の礼拝所がある。16cに神聖ローマ皇帝カール5世はこの建物の一部を壊し素晴らしいカトリックの礼拝堂を作ります。後日、彼はここを訪れた時こう言い残しています。「どこにもあるような大聖堂のために、この世で唯一のモスクを壊してしまった・・・」歴史を捨てることは簡単ですが、もう元に戻すことはできません。

簡単に歴史を捨てる人は何を抛り所に生きているのでしょうか。この年になって「歴史」という言葉を考える時間を大切にしています。